

[成果情報名] 早期水稲における苗箱施用剤チアメトキサム・ピロキロン粒剤によるイネクロカメムシの防除

[要約] チアメトキサム・ピロキロン粒剤は、早期水稲において苗箱施用することによりイネクロカメムシに対して長期の残効があり、密度抑制効果が高い。

[キーワード] 早期水稲、イネクロカメムシ、苗箱施用剤、チアメトキサム・ピロキロン粒剤、密度抑制

[担当] 総合農林試験場・環境部・病害虫科

[連絡先] 電話0957-26-3330、電子メール m.komine@pref.nagasaki.lg.jp

[区分] 水稲（生産環境）

[分類] 普及

---

[背景・ねらい]

水稲害虫イネクロカメムシは、近年、本県では平戸や壱岐地域の早期水稲で発生が顕在化し問題となっている。しかし、その防除対策は、現在本田での薬剤施用のみである。処理が簡便でウンカ類に登録がある現行の苗箱施用剤は、本種の主な水田侵入時期が5月下旬～6月下旬と田植えからの期間が長いため、効果の持続が期待できず、本種に対する同時防除効果は低いとされてきた。

しかし、最近、ウンカ類を主な対象に長期残効がある新たなネオニコチノイド系の苗箱施用剤が数種開発され、イネクロカメムシに対する効果も期待される。

そこで、その1剤であるチアメトキサム・ピロキロン粒剤について、早期水稲におけるイネクロカメムシ対策剤としての有効性を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. チアメトキサム・ピロキロン粒剤（50 g/箱、移植当日処理）は、早期水稲において苗箱施用することにより、イネクロカメムシの本田密度を極めて低く抑える。

[成果の活用面・留意点]

1. 本県の早期水稲は2,300haあり、平戸や壱岐地域等のイネクロカメムシの発生地域を主体に普及できる。
2. 本剤を苗箱施用することで、水稲生産の安定化が図られ、本田での防除回数低減や防除の効率化により、コストの低減が期待できる。
3. 本剤の効果持続は、約60日程度期待できる。
4. 本剤のイネクロカメムシに対する有効成分は、チアメトキサムである。
5. 本剤は、本成果等を基に、本種に対して2004年7月に農薬登録され、いもち病、ウンカ類、ツマグロヨコバイおよびイネミズゾウムシに対しても登録がある。
6. 普通期栽培においても有効と思われる。

[具体的なデータ]

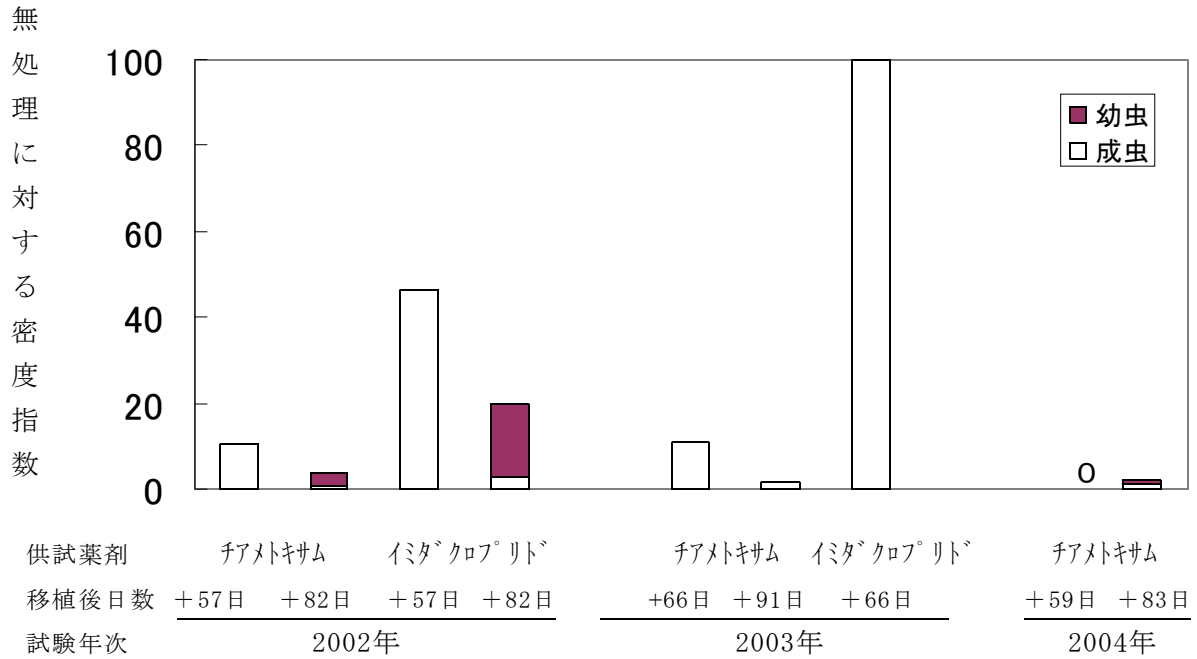


図. チアメトキサム・ピロキロン粒剤施用区におけるイネクロカメムシ成・幼虫数の無処理区に対する密度指数

試験場所 老崎市芦辺町現地農家圃場、品種 コシヒカリ

供試薬剤 チアメトキサム：チアメトキサム・ピロキロン粒剤

イミダクロプリド：イミダクロプリド・トリシクラゾール粒剤（イネクロカメムシには農薬登録を有しないが、チアメトキサム・ピロキロン粒剤と同一系統の成分を含有し、ウンカ類を主対象として現地慣行で苗箱施用されていることから、対照として用いた）、処理はいずれも移植当日、箱当たり50g

移植日 2002年4月25日、2003年4月18日、2004年4月24日

成・幼虫の別はチアメトキサムおよびイミダクロプリド区内における割合

[その他]

課題課題名：病害虫防除新資材の合理的利用試験

予算区分：県単

研究期間：平成14～16年度（昭和47年～）

研究担当者：小嶺正敬、福吉賢三